

日々を過ごす子どもや職員にとつては、「何でもない日常」なのでしょう。

家庭学校の子どもたちは、入所してある程度の期間が過ぎれば、「一生懸命やっています」「大変です」という感覚で毎日過ごすのではなく、当たり前のように、何でもないことのように毎日を過ごしているのではないかと想像します。ただ単に大変なのではなく、大変だけど「充実してる」とか「たのしい」とか、そんな感覚で過ごしているのではないかと思うのです。そして、そのように感じる事ができないうちは、元の社会に戻ってもうまく生きてはいけません。

人工知能が急速に進歩する世界で、人が人として生きる力を養う家庭学校の存在は、今後ますます重要になると感じます。仮想現実の世界がどれほど面白くても、可能性があつても、それだけでは生きていけません。人として確かに生きていく実感、それを掴むことができるのが家庭学校だと思っています。

(望の岡分校 第三任教頭)
(湧別町立芭露学園 校長)

『ひとむれ』の対話的世界について

河原 国男

私は家庭学校に三十年間勤務された石上館長の藤田俊二先生の日記を二十年ほど前先生から託されて(口頭で伝えられたのは二〇〇〇年宮崎大学に講演に来ていただいた折と記憶しています)、色々な研究させていただいています。

その日記は、先生の著書『もうひとつの少年期』が示すように、生徒別に、その生徒の日々の出来事と、先生ご自身の所見を記述しています。特定の形式的な様式があるわけではなく、大学ノートに自由に記述されています。「* * * 兎相の* * * 先生に伴われて* * * 君が入校した」で始まり、卒業の日まで、作業班活動を通じて、あるいは自由な時間で森の自然

の情景の中で、生徒たちと先生とが対話的に交流している様子が豊かに記述されています。生徒たちの表情や言葉、そして行動が、飾り気のない素朴な言葉でいきいきと描き出され、詩のような数行に会話うこともしばしばです。時に頁全体に「大喝！」と色鉛筆で勢いをもつて大書していることもあります。その折の熱気が迸っているのです。日記の膨大な量のみならず、こうした日々の印象深い出来事の記述が示す質的水準に圧倒されて来ています。そこに、一学校史上、そしてわが国の教護事業史上の際立った一つの達成であるとともに、(少し大袈裟に聞こえるでしょうが)それを超えた、洋の東西、古今を視野に入れた「普遍史」的吟味に耐えうる一つの「世界」があると思つています。校祖留岡幸助の視野を思えば、けつして唐突な予想ではないでしょう。そして、そのような意義を、広く共有できる姿で明らかにしたいという一心で今日に至っています。「家庭学校

の先生にぜひ自分の日記を読んでもらいたい」と先生は語っていましたが、私からすると、家庭学校の、と限定することはできない生命力を内に含んでいるでしょう。

そうした日記資料に向き合っている立場から、『ひとむれ』という機関誌に接します。今、私の手元にあるのはわずかで、藤田家の資料調査で得ることができたガリ版刷りのいくつかと冊子体の「収獲感謝特集号」の教冊(いずれも一九六〇年代、九〇年代)、谷昌恒先生の『ひとむれ』と題した著作、そして仁原正幹先生の『新世紀「ひとむれ」』(二〇一九)です。これらに掲載された、生徒たちに向けた校長講話、生徒の文章、作業班活動の記録などの記述に触れて、私の抱く予想の一つは、誰にも直ちにわかる明示的な形ではないかもしれないが、これらにも、問いと答えに間がある、そのような対話の様々な姿がうかがえるに違いない、ということでした。

ガリ版刷りの『ひとむれ』六六八号、平成八年三月一日発行の全十二頁には、谷校長先生の「次郎少年の歩み」と題した文章が掲載されています。五頁に及びます。里子に出された幼年期から人との出会いを通じてその成長の姿を丁寧に辿った後、先生は最後の頁で、「山の中腹の大きな岩の裂け目に根を張っている松の木を見たことがあります」と、次郎の姿に触れます。そして、「新しい母の弟」でもある「訓導」徹太郎の言葉を引用します。「岩の割れ目で目を出したらその割れ目を自分の住家にしてそこで楽しんで生きる。岩を敵にまわして闘うのではない。むしろありがたく味方と思つて、それに親しんでゆく。運命を喜ぶものだけが正しく伸びる」。こうした引用の後、谷先生は、「次郎は、自分の姿勢を変えたいと思つていました。誰かに愛されたいとばかり願つていた自分を進んで人を愛する人間に変えたいと思つてきました」とご自身の所見を付け加えます。

その上で、先生は最後の段落でこう記しておられます「今、次郎は十四歳、諸君と同じ年齢です。泣きながら、傷つきながら、考えながら歩み続けています。真実のその歩みを『次郎物語』を通じて、諸君と共に、さらに学ぶ機会が欲しいと思つ」。

「諸君と同じ年齢です」という指摘には、「次郎」と重ねることが出来る家庭学校の生徒たちに対する、谷先生の共感的な理解が込められています。君たちはどう生きるか、という問いかけを導くものです。生徒たちは、この問いかけに対して、自覚的に「次郎物語」に関連づけなくとも、日々の生活と作業活動、学習の努力を通じて、事実として応答してきていることでしょう。家庭学校の歴史は、その応答の蓄積として存在することでしょう。そのように推測するとともに、関連して、私はこう思います。谷校長先生と同じ時代、藤田先生が日々の実践の中で、より至近距離で積み重ねられた問い

かけと応答のありようと、『ひとむれ』での校長先生の問いかけ（講話の記録も含まれる）は、どのように対比できるだろうか、と。校長からの語りかけを記している『ひとむれ』は、この点でも私にとつても貴重な、第一級の研究資料です。谷先生のこの文章が掲載され、二年後の平成十年以降に家庭学校も「児童自立支援施設」になりました。入所する子どもたちの状況変化（日常のコミュニケーションが難しい）に対応して、子どもたちに対する働きかけに、確かな指針を示す伝統として受け継いでゆく部分とともに、新たに付け加えなければならぬところも生じてくるでしょう。

仁原先生（元校長・現理事長）の『新世紀「ひとむれ」』は、「講話」を在数多く掲載しています。「家庭であり学校であること」という中心理念の把握も、その中に含まれています。先生は、「偶然の力」ということに着目しておられます。言葉として一見、奇異に思われますが、

外教育に関心がありました。家庭学校と共に創設者留岡幸助の名前を知り、大自然が人間を感化するという思想に引き付けられ、「森の学校」と呼ばれる家庭学校に興味を持つようになりました。

その後、五代校長谷昌恒氏の『ひとむれ』を読んで、家庭学校の普段の生活や作業の様子を知り、「よく働き、よく食べ、よく眠る」という人間として生きることの基本を十分体験して心身を養うという考え方に共感しました。そして、この「全人教育」が、さらには「目に見えないものへの畏敬の念」に通じ、下支えされていることに深い感銘を受けました。

このような北海道家庭学校との出会いを介して、私は環境と教育（人間形成）の関わり広さ・長さ・高さ・深さに目を開かれるようになり、それを「環境教育」という言葉で捉え、私の研究主題としてきました。

大学では、環境教育を専攻する学生た

自分の意志で選択したのではない出遣い（厳しい境遇も含め）を受け止めることを求めるのでしよう。運命というよりも「力」として把握することで、より納得しやすいかもしれない。こうした「偶然の力」を提唱するといつても、同時に、けつして所与の条件に素朴に忍従するのではなく、「自分を変える」ことも、強いメッセージとして発しています。こうした仁原先生の語りは、先生自身引用して根拠づけ、あるいは環境条件で説明しておられるように、これまでの家庭学校の伝統に属します。他方で、書名タイトルでも示唆されているように、新たに付け加えておられる面もあります。「三能主義」に「能く考える」を加えた「四能主義」の提示です。自立支援施設としての家庭学校が、他の施設と同様に、新たな課題に直面しているという歴史的ともいえる覚悟を顕著に示していると思えました。生徒たちは、それぞれに困難を抱えながらも、こうした期待に応え続けて

いることでしょう。

校長先生に限らず、寮長先生夫妻、そして生徒たちの種々の対話的世界がどう展開しているか、『ひとむれ』に示されたその精神の軌跡とその蓄積も、北海道家庭学校の貴重な財産であるに違いありません。このことについてこの度思うにつけ、藤田先生が日誌作成に日々打ち込むことができた一つの背景も、こうした『ひとむれ』の対話的世界の存在もあつたのか、と考えました。

（宮崎国際大学 教授）
（宮崎大学 名誉教授）

「新しい人」に！

原子 栄一郎

北海道家庭学校の名前を初めて知ったのは、大学で読んだ教育学のテキストだったと思います。当時、私は子どもたちの野外活動や自然体験活動に熱中し、野

ちと座学だけでなくフィールドで実物に触れ、手足を動かさし心と頭を働かせて学ぶことを大切にしています。フィールドスタディでは、公害・環境問題に揺れ続ける水俣や福島その他に、ある明確な意図を持つて「不便な辺境の地」に設立された共同体を訪ねています。山の中で創造的な農的暮らしを实践する「くだかけ生活舎」（神奈川県）、いろいろなハンディキャップを持つ人たちが山の中で自活自活して共に生活する「真木共働学舎」（長野県）、山間に建てられた全寮制無教会主義の「基督教独立学園高等学校」（山形県）、そして「北海道家庭学校」です。

長年の念願が叶い、二〇一六年に初めて訪問しました。短い滞在でしたが、森を歩き、寮舎で子どもたちと一緒に生活し、作業を手伝い、行事にも参加し、「森の学校」を体感することができました。私たちは、現在、貧困、飢餓、紛争、気候変動、感染症など、多くの問題に直面し、人間だけでなく、生きとし生ける

ものが共に安定して生存・生活し続けることが危機にさらされています。この解決に向けて、「誰一人取り残さない」公正で持続可能な社会を実現するために国連で採択されたのがSDGs（持続可能な開発目標）です。今、社会の中でいろいろな取組みが行われています。

私は、問題と同時に、問題を引き起こしている人間のあり方にも目を向け、大學生一人一人に問題を自分のこととして受け止め、向き合って欲しいと思っています。そこで、ゴーギャンの絵画にならつて「私はどこから来たのか、私は何者か、私はどこへ行くのか？」という問いを立てて、自分を問い、自らを振り返る試みをしています。その最良の機会がフィールドスタディです。便利で物質的に豊かな都市での生活を一時離れ、自然と深く関わりながら日々の暮らしが営まれている場所で、そこで生活する人たちと同じ活動を体験し、それぞれが身をもって何かを感じ取りながら先の問いを自問